

第60回記念 青雲塾 報告

<http://www.seiunkai.net/kouryu/seiunjuku/list.html>

青雲塾担当 松井繁幸 (第23期)

1. 日時 6月2日(土) 午後1時30分～5時00分
2. 場所 大阪大学中之島センター 多目的室608
3. 会費 2,500円 (・レクチャー 1,000円 資料代その他経費を含む。・茶話会 1,500円)
4. 講師 北野栄三先生 (青雲会 旧制Ⅲ期生 1953年卒業)
5. 演題 「新聞記者は何をしてきたか」
6. 講師のプロフィール

1930年、大阪生まれ。旧制大阪高校を経て京都大学文学部中退。大阪大学法経学部卒業。毎日新聞社(大阪本社社会部、東京本社「サンデー毎日」編集部)。毎日放送(報道局長、テレビ編成局長、常務取締役)を経て、1990年、和歌山放送社長、2006年、同会長。

その間、同志社大学文学部、立命館大学国際関係学部講師。和歌山経済同友会代表幹事。関西民放クラブ会長。

(主な著書) 『紀州人』 『メディアの人々』 『メディアの光景』 (以上、毎日新聞社)

7. 講師からひと言

ジャーナリズムの活動は記事を書くだけではありません。将棋のタイトル戦の最初になった名人戦(昭和十年から)は、毎日新聞の阿部真之助と黒崎貞治郎の二人の発想から誕生しました。それまでは世襲の家元制のような形だったのです。これが将棋界を変えたと大山名人が言っています。(本因坊戦など囲碁も同様)

ベトナム戦争を日本人に身近にしたのは”国際事件記者”として名を売った毎日新聞外信部長大森実の活動からでした。ジャーナリズムではたった一人の発想が大きい流れをつくることがあります。

世界でも多くの例があります。アメリカのキャスター、ウォルター・クロンカイトのコメントの一言がベトナム戦争をやめさせたといわれています。フランスのクレマンソーは新聞記者時代にドレヒュス事件で「知識人」という新語をつくって知識人層を結集させ、事件に大きな影響を与えました。

その他、いろいろエピソードがあります。

8. 参加者から

今回ご参加の元朝日新聞記者の小橋繁好さんから感想を寄せていただきました。

「私が新聞記者を志した大きな要因はベトナム戦争報道でした。高校生だった私は父親に頼んで、地元紙のほかに毎日、朝日の両紙を購読してもらいました。

紙面には日々、悲惨な戦争を伝える記事が溢れていました。そこには米軍発表記事以外に、各新聞社の記者が真相を求めて危険な戦場を這いながら取材し、レポートする競争を繰り広げていました。新聞が最も輝いていた時代だったかもしれません。

中でも感銘を受けた記者の一人が毎日新聞外信部長の大森実さんでした。初めて北ベトナムのハノイに入り、北爆の悲惨な状況を日本だけでなく世界に伝えました。大森さんが企画した連載記事「泥と炎のインドシナ」は、その名タイトルとともによく覚えています。

今回、新聞記者の大先輩である北野栄三さんから当時の模様をお聞きすることができました。本当に有難う御座いました。」

小橋さん（青雲会18期）は、2014年1月22日、第43回青雲塾で「取材の現場－グリコ・森永事件など」をテーマで語っていただきました。

<http://www.seiunkai.net/kouryu/seiunjuku/2013/43.html>

9. 青雲塾担当から

今年3月にあった織田作之助賞の祝賀会で、天満天神繁昌亭の恩田雅和支配人(第55回青雲塾講師2017年3月19日)に、出席されていた北野栄三氏を紹介していただきました。青雲会の大先輩とあとで知り、ご著書『メディアの人々』での「初心とは、原子炉や、警察や、政治や行政や、そしてメディアも、何のために誰のために存在するのかをふまえることにある」と書かれているのが印象に残っています。そこで早速、今回の講師をお願いしました。毎日新聞記者から、毎日放送など、さまざまなメディアを経験され、今回も現代の社会・政治状況や新聞・放送業界にもジャーナリストの目で鋭い問題意識を披露されました。

また、茶話会では終戦のときにおられた大阪陸軍幼年学校のお話が出ましたが、残念ながら時間切れ。文学や映画などを含め、たくさん引き出しをお持ちなので、あっという間にお開きに……。全く、北野さんのエネルギーと記憶力には圧倒されてしまいました。

第60回記念という区切りの青雲塾で、北野講師と活発な質疑で盛り上げていただいたご参加の皆さんに心から感謝します。



①さあ、レクチャーの始まり



②背筋の伸びた姿勢で語る北野講師



③茶話会でくつろいで



④小橋さん(左)と新聞業界について